

四 小 咄

廣 瀬 哲 郎

〔 科学技術振興機構さきがけ研究員
東京医科歯科大学 〕

国外に出てニュアンスや常識の全く違う世界に身を置いてみると、それまで考えもしなかった事につまずいたり、驚いたり、さらには客観的に考えたりしてしまいます。ここでは、私の海外生活中で印象深かった個人的なエピソードを紹介させていただきます。

1. 黒い髪の日本人について

慎み深く生きるというのは、日本人独特の美意識の現れであると思います。私自身の事を考えてみても、感情を奥に隠そうとする性癖があるように思われますし、自分が意図するところを相手に「察してもらおうとする事」もしばしばです。また直接的な刺激よりも、むしろ隠されていたものが何かの拍子で見え隠れするさまなどに強くひかれたりすることもあります。ところが国外に出てそれまでの「常識」が通用しない状況になり、同時に特有の慎み深さを捨てきれないでいると、いささか厄介な混乱状態に陥る事になります。さらに日本人特有の恥の意識が、この混乱に拍車をかけることになります。

アメリカの学生たちは大なり小なり自己を表面に押し出し、評価を乞うということをしばしばするようです

れまで萎縮していた私の凝り固まった部分を崩壊させてくれるものでした。

それまでの私は、アメリカ人的に振る舞う事を自らに課していたと思います。しかしながら、実は外国にいるからこそ外国人はそのアイデンティティをさらけだすことに価値がある、と気づいたのでした。海外での素直な暮らし方信条は「日本人らしく凛として」といったところでしょうか？日本人らしいベタベタの英語でもいいのです（正しく話すことが大切です）。ブロンドやブルネットの中での美しい黒い髪は、日本人のアイデンティティの象徴のように思われました。

ところが自問自答の末、このような答えを見いだしたと気を良くしていた私は、帰国後、反乱する奇妙な英語表現の数々、そして何とも中途半端にカラフルな髪が通り過ぎていくのを目の当たりにし、この答えを日本国内で実践するのは、逆に波風をたてかねないという新たな悩みを持ち始めています・・・。

私がアメリカで生活を始めたころは、人一倍こうした感情の狭間で混乱し、不思議な劣等感に苛まれていた気がします。それは大部分が貧困な言語力によるものであることは分かっていたのですが、日常生活における振る舞いや容姿に至るまで、周囲のすべてのものの中で「冴えない日本人」である印象を勝手に背負っていたと思います。当地には多くの日本人留学生がおり、少なからず似たような悩みをもっていたようでした。しかしそんな中でネイティブスピーカー並みの会話をたしなみ、ジェスチャーから立ち振る舞いまでうらやましいほどキマっているT氏がおり、「いつになったら自分もあのようにできるようになるのか？」と思ったものでした。ところがあるパーティーでT氏をよく知るデンマーク人Kと話していたときのことです。突然彼女が言ったのです。「Tは確かに英語は上手だけど、でもあれだと彼が日本人なのか、アメリカ人なのか分からないわ。なんか中途半端ね・・・」この何気ない一言は、そ

2. Jack & Diane -ハッタリのすすめ-

アメリカ生活初期に得た教訓は、「OK! やっておくから」或いは「大丈夫、電話するから」などという調子の良い言葉に遭遇したら、すべて語尾を否定形に変えて解釈するのがよいということです（例えば上記の文句は「OK! 放っておくから（知らないよ）」や「大丈夫！多分電話しないから」と読み取ります）。私たち日本人にはこれらは受け入れ難く、言われた通りにおとなしく待ってしまった後に、ようやく「ウソ」だと気づき真面目に腹をたてたりします。「ウソ」の概念は、各国違うようだという事をこうして肌で感じとっていくのです。これらは言わば「ハッタリ」とでもいうもので、面倒なことを回避するためなどに日常的に使われており、時には困ってしまうこともあります。ハッタリという私にとっては、U-HAUL という悪名高きレンタルトラック屋とのトラブル話が印象的ですが、あま

りにも個人的な話ですので、今回は研究室での印象的な体験をご紹介します。登場人物は Jack & Diane, 二人の若いアメリカ人学生です。

私と一緒に働く事になった (Jack ならぬ) J は、半年間の研究室研修 (学部の学生実習のようなもの) のために研究室に来ていましたが、それまでの 1 ヶ月の間にすでにスロバキア人大学院生 P とあわやつかみ合いの喧嘩の寸前までいった札付きものでした。困惑したボスが思案し「温和で、物わかりよく、無害なテツに」と私のもとに送られて来たのでした。さて一方の Diane はカレッジを出た後に、一念発起し医学系大学院に編入を果たした女の子で、典型的アメリカの「おせっかい型オバさん予備軍」という強烈な風貌でした。

J との実験は困難を極めました。「末は医者かミュージシャン」と豪語する J は、現代音楽論という講義を受講しており「ブリティッシュパンクバンド、スージー・アンド・バンシーズとザ・クラッシュの音楽性の比較」などというレポートをベンチの傍らで書いていたかと思いきや、ラッパーのごとく軽いステップを踏みながら $10\mu\text{Ci}$ の αUTP をピベッティング・・・という具合だったのです。ある日、J のベンチが妙に荒れているのに気づいた私は、ガイガーカウンターをあてたところ驚異的な汚染を発見。そしてそれはベンチに留まらず彼の使っていたほとんどすべての器具、ゴミ箱、シンクにまで及んでいました・・・。半年が夢のように過ぎ、J は数枚の現代抽象絵画のようなノーザンブロットを残して去って行きました。私はボスと相談し「恩赦の念」を込めて B- (マイナス) という評価を進呈しました。

一方の Diane はというと・・・彼女が大学院生としてやって来た 3 日目には、研究室で起こった 10 年分の出来事を誰よりも知っている、という雰囲気漂わせ始めました。研究テーマを決める段になり私のところにやって来た彼女は、ひとしきり自分が哺乳類の遺伝子発現にどれほど精通しているかを語った後、ついにうっかりペンを走らせてしまったのでした。「イントロンはスプラシングでこう切り出されるから云々・・・」彼女が自信満々に書いたラリアットイントロンが図 1 の通りです。Diane はそれから 3 週間ほどラボに出入りをしていましたが、ある日突然姿を消し、彼女のもとのフィールドの研究室に移ったと聞きました。

さて話は再び J に戻ります。ラボを去って 1 ヶ月ほど経ったある日、神経質そうな顔で現れた J は、自分の使っていたベンチの整理をしたいと唐突に言い出しました。そのベンチはすでに別の学生が使っていたのでそれを伝えると何

も言わず素直に部屋を出て行きました。入れ替わりにボスが怪訝な顔つきで私のところに来て「J は何の用事で来たの？」と問いかけてきました (この時ボスにはその後遭遇する状況が予測できていたようなので

す)。数時間後、私は突然教授室に呼ばれました。なんとそこには J がおり、困り果てた顔のボスが言うには「J が B- の評価が気に入らず談判に来ている」。J の言い分はそれはすばらしいものでした。「自分は毎日一生懸命注意深く働いた。テツの言う通りに働いたし、結果も十分出した (注: 結果=現代抽象絵画)。当然 A をもらえるはずなのに B- がついていたのは何かの間違いではないか? 自分のこれまでの受講科目は全部 A なんだから B- は困るんだけど云々」ハツタリもここまでいくと流石のアメリカでも通じません。ボスと私のきめ細やかな説得は、夜の 10 時過ぎにまで及び、「もはや覆らぬ」と悟った J は案外素直に去って行きました。

私にとって、痛ましいくらい明白なハツタリをかます J

や Diane は全くもって異様な存在に映りましたが、それでいて彼らの姿は、まるでかつてのアメリカンニューシネマの主人公のごとく憎めない残像なのです。そして驚いたのは、ボスが彼らのこういう言動をある程度予想していたらしいことです。J たちのやり方は、あまりにも大味で粗雑なものでしたが、アメリカの学

生たちは大なり小なり自己を表面に押し出し、評価を乞うということをしばしばするようです。私たちからすると、あまりにもあからさまな印象を受けますが・・・。しかしこの点が、「評価をしてもらう」が基本で、「待ちの一手」の日本の学生とあまりにも大きく異なるところだとつくづく実感する今日この頃です。

3. 金の背光—そして Steitz のこと—

神々しいという言葉は、日常生活では縁遠いものですが、「もしかしたらこのことかも」と感じられる瞬間のお話をします。私のボスだった Joan Steitz は、人をその気にさせる不思議な能力を兼ね備えています。有名な彼女の笑顔と連続瞬きの併せ技は、ボスドクが良いデータを出した時に祝福の意を込めて用いられる一方で、大学院生に対して困難な実験を仕向ける時などにも効果的に用いられます。ラ

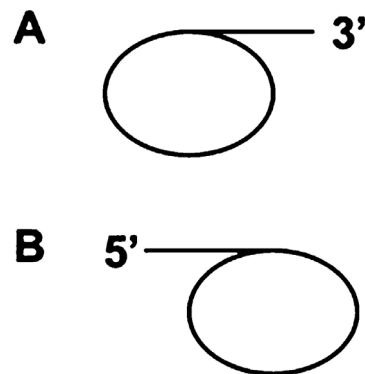


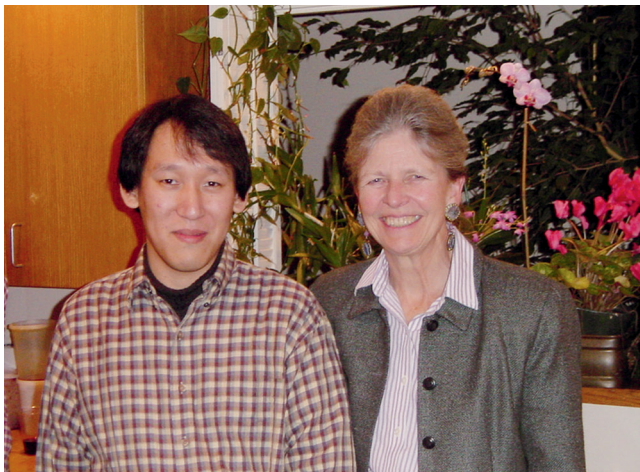
図 1 ハツタリ型ラリアットイントロン
どちらがハツタリでしょうか?

しかしこの点が、「評価をしてもらう」が基本で、「待ちの一手」の日本の学生とあまりにも大きく異なるところだとつくづく実感する今日この頃です

ボのメンバーは、いつの間にかその虜になっており、それぞれ「Joan からの祝福」を至上の喜びと感ずるようになっていきます(かく言う私もその一人でした)。北欧系血筋の彼女はそのルックスからも高い品格を漂わせていますが、講演の壇上に上がった時などにハッとするほどの輝きを放つことができました。まるで金色の鱗粉が放出されるかのごとく全身が浮き上がって見える気がしたのです。これは決して私だけの錯覚ではなく、複数のポスドクや大学院生もそれぞれの心の中で目撃したと証言しています。

そうした外見的なことは別にして、Steitz 教授はどうあっても「尊敬せざるを得ない」と感じられるボスです。彼女の研究室から報告される仕事には独特の薫香があります。時として決してエレガントとは言えず、息が詰まるような苦しい手法を駆使してまでも一步を先んじようとするところに「Steitz らしさ」があると思います。外見の華やかさとは裏腹に、研究室での Joan は常にひたむきで、時には無骨なほどに真面目な一研究者です。毎週欠かさず行われるミーティングでの姿勢は、大風呂敷を広げない事、深部への苦しい一步を実現する事、そして最も効果的な方針を的確に言い当てる事、ではなかったかと思えます。彼女は学生が大好きで、彼らが紆余曲折の末に垣間見せる能力の片鱗を見いだすのが生き甲斐だと言っていました。しかし同時に怠惰で甘い学生には容赦なく厳しくあたることもしばしばでした。一方でポスドクには放任主義を敷いていました。テーマの選定から実験の進め方のすべてにおいてポスドクの考えが尊重されました。或る意味でこれは非常にきつい事でもある訳ですが・・・。

サイエンス抜きの Joan はあり得ないと人は言います。



Steitz 教授と筆者

時として決してエレガントとは言えず、息が詰まるような苦しい手法を駆使してまでも一步を先んじようとするところに「Steitz らしさ」があると思います

競争主義がクローズアップされるばかりのアメリカのサイエンス社会ですが、一方で地に足のついた教育制度と哲学理想がしっかり存在している事を忘れてはならないと思います

「(ご主人の) Tom はヨットなどいくつか息抜きの趣味を持っているが Joan にはサイエンスだけだ。」と研究室に15年ほど居着いているポーランド人研究者が私に教えてくれた事があります。彼女はサイエンスが好きで好きで仕方がなく、自分と同じようにサイエンスの虜になっている人たちを同僚として尊重し、心を開いてつきあおうとしているようです。一方で、彼女の周囲の人々もそうした彼女の姿に敬意と共感の念を抱き、信頼関係を結ぶ事を無上の喜びと感ずられるようになるのです。こうした関係こそが研究室の最も目指されるべき姿ではないかと思えます。以前、有名なアメリカの音楽家レナード・バーンスタインが、曲者ぞろいのウィーンフィルの演奏家たちをあとと言う間に手懐けてしまったエピソードを聞いた時に、Joan と周囲の人々との関係と同じような温かな印象を持ちました。つまりそれは、彼女のずば抜けた scientific な才能によってだけではなく、ウィットに富んだ、それでいてひたむきな彼女の人間性によって裏打ちされているのです。そしてバーンスタインもそうであつたと言われています。

4. 光と真理－再び日本から－

帰国後、「日本に再適応してしまった」と感じたのは、往來の赤信号を抵抗なく待てるようになった時でした。実は何も来ない赤信号で、ぼーっと立ち尽くしている集団ほど異様なものはないのです。

こうした「規則に従っていれば間違いが起こらない」という考え方は、日本社会の一つの基盤になっていると思われる。しかしながらその一方で、こうした姿勢のために日本では非常にきめの細かいサービスが受けられるわけです。アメリカ人は、こうしたやり方に対して「日本人は meticulous である」と言います。ご存知の通りアメリカのシステムの変わり身の早さは、時として驚異的です。それは一つに細かい事にこだわらないやり方と、「やり直し」を気にしない姿勢に支えられていると思います。ですから新しいルールをどんどん作り、「出たとこ勝負」的なスタイルを押し進めていけるのです(それは個人の生き方においてもいえることです)。こうした人々の作り出すサイエンスの世界では、さらに動きが鋭敏です。彼らは、先駆的な研究のことを「Cutting-edge な研究」という言い方をしますが、まさしく「先端」を取り合うような激烈な競争構造を呈しています。そしてそうした競争が激烈になればなるほど、それを好んでさらなる力を発揮するような輩もいるのです。

こうした世界の人々と「慎重深い日本人」の間には大きな隔たりがあると思います。ですから最近の日本の研究者

の世界で起こっている奇妙な変革の波については複雑な心境で眺めざるを得ません。日本人の気質に即した「サイエンスの質」をアップされる独自の方法を考案することの方が大切なのではないのでしょうか？ 競争主義がクローズアップされるばかりのアメリカのサイエンス社会ですが、一方で地に足のついた教育制度と哲学理想がしっかり存在している事を忘れてはならないと思います。私にはそればかりが目につきました。Yale 大学のエンブレムにはラテン語で「Lux et Veritas (光と真理)」とあります。効率や応用性など目先のものに惑わされがちな今だからこそ、しっかり地に足のついた質の高いサイエンスを実践しなくてはならないと考えます。そしてそれが私の国外での研究生活の中で勝ち得た収穫であったと思います。



Yale 大学のエンブレム
「Lux et Veritas (光と真理)」

プロフィール

1995 年名古屋大学大学院理学研究科中途退学，理学博士，名古屋大学遺伝子実験施設助手，米国イエール大学ポスドクを経て，2004 年から科学技術振興機構さきがけ研究員及び東京医科歯科大学客員助教授。

廣瀬 哲郎

Tetsuro HIROSE

(科学技術振興機構さきがけ研究員)

Society

大学院教育 ③

アメリカで Ph.D. を取得して思うこと

門 脇 辰 彦 (名古屋大学大学院生命農学研究科)

はじめに

編集長の塩見さんから，気楽に日米の「大学院教育」の違いに関する「文化人類学的」なエッセイを書けということで，前任者の栗原さん (Vol.3, No.1) の期待に答えるべく書かせて頂きます。とても気楽にはいけませんが，とほほ...。まず私の経歴を簡単に紹介します。1988 年 3 月に名古屋大学農学研究科修士課程を修了し，同年 8 月に米国ケースウェスタンリザーブ大学医学研究科病理学専攻に入学しました。1994 年 1 月にめでたく Ph.D. を取得し，その後ハーバード大学医学部，名古屋大学生物分子応答研究センター，スタンフォード大学医学部，カリフォルニア大学サンフランシスコ校でポスドクをやり，1999 年 4 月から現職の名古屋大学大学院生命農学研究科・農学部助教授になっています。アメリカでは上記 4 つの大学に所属しましたが，基本的な大学院教育システムは全く同じです。したがってこれから比較していくのは，アメリカの，主に医学研究科 Ph.D. course の大学院教育と名古屋大学大学院生命農学研究科（皆さんが所属されている大学院とは少し違いがあるかもしれませんが，良く似たもの

2 年目に行った実験のデータ等を含めて，NIH grant proposal 形式で論文を作製し，Thesis committee に対して自分の研究計画を説明します。大学院生は，この試験にパスして初めて Ph.D. candidate として認められます

でしょう)ということになります。

大学院入学時点における日米の違い

アメリカの大学院に入学した時点では，各々の大学院生の指導教官は決まっていません。私がケースウェスタンリザーブ大学医学研究科に入学した時は，まだ医学研究科所属の各々の Department ごとに大学院生を取っていましたが，翌年からは Biomedical Science Training Program といって，丸ごと医学研究科の Ph.D. course の学生として取るようになりました。現在，アメリカの医学研究科の Ph.D. course は全てこのシステムになっているはずですが。つまりこれは，学生が将来 Ph.D. を取得するために一緒に研究する faculty (つまり指導教官) の選択の幅を広くするためのシステムです。ケースウェスタンリザーブ大学医学研究科でも，様々な分野の 100 人以上の faculty (教官) がいますので，大学院生にとってはよりどりみどりの状態です。そこで，大学院 1 年生は自分の興味に合う研究を行っている faculty を平均して 3 人選び，最初の 1 年目にこの 3 人の faculty の研究室を回ります。これが Lab